力あわせて

全国の放送伝道協力会を紹介します。

山口世の光を支える会

「さわやか世の光」
KRYラジオ(月)～(土)5:15am～

宣教団時代･･･最も福音の伝わりにくいところで種をまきましょう！

吉田松陰で有名な山口県萩市。1953年に、日本キリスト兄弟団(けいていだん)のピーター・ウイルムス宣教師が来日しました。その頃は、すでに多くの宣教団が来日、大都市のほとんどは他の宣教団が入っていたため、その当時、「福音が一番伝わりにくいところはどこだろうか」ということで、萩の地で宣教を開始したのです。

萩田床山キリスト教会の岡野雅治師と深川キリスト教会の西村公子師にお話を伺いました。

山口県萩市は城下町でしたから、当然仏教が強い所で、開拓における大変な苦労があったことが想像できます。そのような状況下で放送伝道は、当時、有効な宣教のツールとして用いられました。記録によると、1958年にラジオ福音放送「よきおとずれ」(30分番組)が開始、PBAの制作のもと放送されていました。その後、1965年から「世の光」へと変わりました。

当時の放送料は月８～９万円。大変大きな金額でした。日本の教会はまだ小さく開拓期ですから、資金もなく、すべて宣教団やウイルムス宣教師をサポートしてくださる方からの支援によるものでした。

岡野師は以前、オクラホマ市にあるキリスト兄弟団の教会を訪問したことがあるそうです。「西部劇に出てくるような農村地帯の小さな教会でしたけれども、初めて私たち日本人を見て、老夫婦の方が、『神様に感謝します。今まで見ることがなかった、同じ主にある、日本の兄弟姉妹に会えたということは、これは私の一生の中で、神様からいただいた大きなプレゼントです』――そのようなことを聞くと、こういう人たちの祈り献げられたものの上に、私たちのスタートがあるんだと思わされた」と言います。そして、放送伝道もそのような方たちの祈りとサポートによってスタートしたのです。

1950年代の台本

左から西村公子師、岡野雅治師、
小林啓一師(現山口世の光を支える会 会長)

さて、その後、羽鳥明師との関わりもでき、羽鳥師は伝道集会などで、何度も山口を訪れています。「当時、来られたのは、一晩くらいでした。長門は１、２回、萩も２回くらいでした。当時、萩に来るということは大変なことでした。新幹線や特急もない時代ですから。羽鳥先生は包み込むような話し方をされながらも、きちっと芯が通っている。淡々と真理を語られているというような感じでした」。

その後、1969年にウイルムス宣教師は宣教団の事情により、急きょ、帰国することになります。その間、「世の光」は継続されましたが、1971年に「山口世の光を支える会」が発足されるまで、郷土の放送伝道のために尽力したいという協力者もあり、繋がれていったのです。そして、「支える会」発足には、当時３名の牧師が中心となって山口県の教会に呼びかけがなされ、現在は「山口県下救霊祈祷会」のもとで放送が続けられています。当時では考えられなかった、日本の教会による放送伝道です。

「ある面で、よく繋がったと思います。」と岡野師。山口県での放送伝道は、宣教団による日本の教会の開拓と共に始められました。その根底にあるのは、ウイルムス宣教師が語った「最も福音の伝わりにくいところで種まきをしましょう」という言葉に表されています。このことは、まさに放送伝道の真髄ともいえ、「そのような場所に、だれかが伝えなくてはならない」という使命によって、今も放送伝道が続けられているのです。